都道府県名	石　川　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	羽咋市立邑知中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	１	７	１７
生徒数	５０	６６	６３	１	１８０	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力を身につけ、生き生きと表現する生徒の育成

２．研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・１年生・国語、数学及び英語
　言語理解（聞くこと、話すこと、書くこと）に対する学力を全ての教科の基礎と考え、特に１年生にその学力を定着させるため国語を選択した。また、学年の実態に合わせて、特に個に応じた指導や基礎・基本の定着が必要な教科であると考えたため。
・２年生・数学及び英語
　理解力や応用力に差が生じやすく、学年の学力的特徴を補うため。
・３年生・数学及び英語
　学年の学力補充を特に必要とする教科と考えられたため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	○　テーマ 　効果的な少人数授業のあり方及び評価規準表による評価活動 ○　研究の見通し（仮説） 　教科や単元などの特性に応じた少人数授業のより効果的な授業形態を研究や評価を生かした指導のあり方などを研究し実践することにより、基礎・基本を身に付けることができる。 ○　研究の内容・方法 ・　数学科、英語科、国語科において、習熟度別学習中心の少人数授業に取り組むことで、きめ細かな指導を行い、基礎・基本の定着にむけた支援・指導を行う。また、習熟度別授業や課題別学習の効果的な方法について研究する。 ・　評価方法、評価規準について研究する。

平成15年度	○　テーマ（副題） 　個に応じた指導のあり方について ○　研究の仮説 ・　補充的な学習・発展的な学習の教材開発に取り組み、生徒一人ひとりの学びに応じた指導を行えば、確かな学力を身につけることができるであろう。 ・　多様な評価を生かした指導を行えば、確かな学力を身につけることができるであろう。 ・　教育活動全般において、発表の場を多く設定すれば、表現力が育つであろう。

○　研究の内容・方法…邑知システムの確立

①　個に応じた指導について

ア　指導法について

a　個別指導、グループ別指導の導入

b　理解の状況に応じた繰り返し指導の導入

c　習熟度の程度に応じた指導の導入

d　興味・関心に応じた課題学習の導入

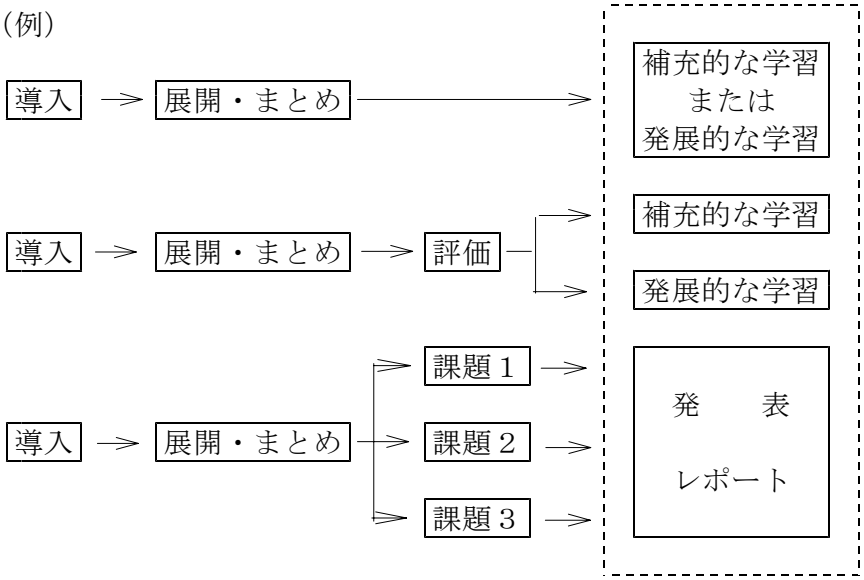
これらを以下のように具体化し、校内授業研究会の視点として、いずれかが盛り込まれた授業を行うことを共通理解して取り組んだ。

・　生徒全員が活発に学習し、生き生きとした表情で授業に臨む授業
・　個に応じた指導のあり方が考えられた授業
・　自己評価、相互評価など多様な評価方法が工夫された授業
・　調べ学習や問題解決型の学習形態を取り入れた授業
・　発表する場面が設定された授業
・　評価の観点が絞られた授業

イ　ゆとりの時間（運用の工夫によってうみだされた時間）について

１単位時間や単元の中の時間を利用して、習熟度の程度に応じた指導や興味関心に応じた課題学習に取り組む。その方法としては、生徒の自主的な選択によるもの、評価により選択されるもの、興味関心に基づいて選択するものなどが考えられる。

（例）



ウ　評価を生かした授業

a　作成した評価規準を授業で生かす工夫をする。

「おおむね満足できる」と「十分満足できる」との状況の違いを具体的に明らかにするとともに、「努力を要するもの」に対しての手だても準備することを共通理解する。

b　生徒に目標や評価規準を事前に明示する。

c　自己評価や相互評価により、学習を振り返ったり問題を解決させるヒントを与える。

d　多様な評価方法にともなった学習展開を工夫する。

e　評価は結果を求めるためだけに行うのではなく、生徒・教師にとって次への学習・指導に生かされるようなもの、つまり指導と評価が一体化するように配慮する。

②　表現力育成について

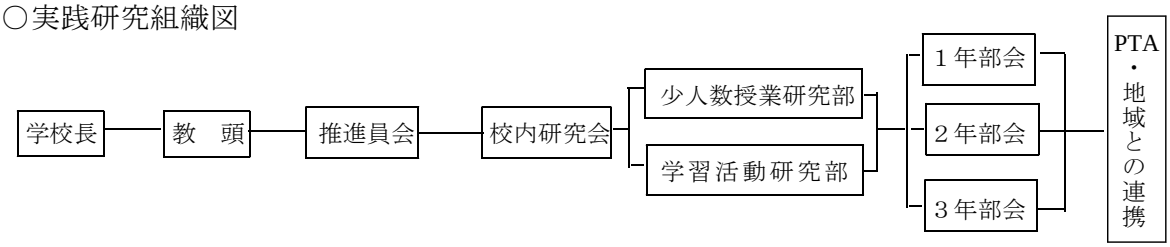
ア　朝のスピーチ

	生徒の表現力の向上と、生き生きと発表できる力をつけさせるために、朝礼の時間を利用して「朝のスピーチ」に取り組んでいる。１分程度の短いスピーチではあるが、「人前で堂々と自分の意見を述べることのできる生徒」や「人の意見に耳を傾けて、さらに自分の考えを持ち発表できる生徒」の育成に役立てたいと考えて、邑知中の開校当時から行っている。 イ　朝読書と本の紹介コーナー 毎月の第２週を読書週間として、朝自習の時間帯に「朝読書」を行っている。これは、本に親しむことにより、読解力の向上と、生徒の「豊かな心」を育てることを目的にしている。取り組み方法は、生徒が選んだ図書を朝礼の前の時間帯にそれぞれが、静かに本を読む方法をとっている。図書の選択については、担任が勧める場合もある。読書後は、表現力の育成と読書後の感想を分け合うため、学級の掲示板に「本の紹介コーナー」を設けた。各自が題名や作者、所蔵場所、みどころやお勧めしたい点などを、簡単に書き表し、他の生徒にも紹介する形式をとっている。 ③　補充学習の実施 ア　補充学習（夏季・冬季休業中） 夏季休業中を利用して、全学年を対象とした「補充教室」を行った。どの学年も「不得意分野の克服」と「学習意欲の向上」を目的とした。 イ　終礼学習 学習意欲と学力の向上のために、「終礼学習」を取り入れることとした。６時間目が終了した後から、終礼までの短い時間を活用し、学力の全体的な底上げを目的として取り組む。 ④　各種調査・アンケートの実施 ア　少人数授業について イ　学習量調査について ウ　県・市基礎学力調査の利用

平成16年度	○　テーマ 確かな学力を身につけ、生き生きと表現する生徒の育成 ○　研究の見通し（仮説） 基礎・基本の定着ときめ細かな指導により自信を持たせ、多様な場面で表現力を養うことができれば、生き生きとした表現をする生徒を育成することができるであろう。 ○　研究の内容・方法…邑知システムの充実 ・　習熟度別少人数授業や、個に応じたきめ細かな指導の実践を積み重ね、確かな学力を身につけさせる。 ・　教科授業、総合的な学習の時間、学校行事、学級活動などのさまざまな場面で、表現力を高める取り組みを行い、生き生きと自分の考えを述べたり表現したりする力を養う。 ・　生徒が身につけた力を適切に評価し、次の指導に生かす評価と指導の一体化を図り、実践を積み重ねる。

(3) 研究推進体制

○実践研究組織図



○本校の特色

少人数授業での取り組みは、国語科・数学科・英語科において実践研究行い、他教科においてはグループ学習などの授業形態を取っている。全職員で学力向上フロンティア事業への取り組みを確立するために、前述の３教科以外の教科担当者は学習活動研究部へ所属し、全員で共通した視点を持ち、指導法の工夫と改善及び資質の向上を図るため授業研究を各自実践し、互いの意見を交わしより確かな学力を生徒が身につけることを目指している。

今年度は地域との連携を重視し、学校公開や学校行事などを通じ地域や保護者の方に学校の取り組みを理解してもらうため説明する機会や評価（外部評価）をいただく機会を意図的に多く持った。また、講師招聘など外部からの意見を求めたり、意思疎通や共通理解を得るための校内研修会を特に多く持った。中間発表会では、複数校のフロンティアティーチャーを招き分科会の司会運営に関わってもらい、協議を重ねることにより事業普及の一助を担ってもらった。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○　国語科、数学科、英語科の３教科において、各教科の特性に応じた工夫を図りながら少人数授業に取り組むことができた。特に、習熟度別授業を取り入れることにより、単元（領域）・教材によっては、とても有効に指導できることが認められた。

○　少人数においては、個々のつまずきに対処でき、発表・発言の機会も増え、より意欲的に授業に取り組むようになってきた。

○　各教科の評価規準を見直し、それに基づいた授業内での評価法及び評価から次の指導へ生かす手だてなど、評価を生かした授業のあり方などについて、全教師が共通の課題意識をもって研究に取り組み実践することができた。

○　表現力の育成においては、授業、生徒会活動、各学年行事等さまざまな場面で生徒が主体的に活動したり発言したりできる場面を設定し、発表力や表現力の育成に取り組み一定の成果をあげることができた。

○　基礎基本の定着のために行ってきた補充的な学習などが、少しずつではあるが定着しはじめた。また、生徒の家庭学習に対する指導を行った結果、生徒自らが学ぼうとする意欲の高まりと学習習慣の確立がより確実なものとなってきた。

○　内部評価・外部評価、アンケートなどを実施し、成果や取り組み状況を目に見える形（数値的なものを含む）にして、学校・学年だより、学校報などを利用した情報公開を行うことができた。

２．今後の課題

○　習熟度別学習中心の少人数授業の効果的な授業法については、より効果的な授業法や少人数クラスの編成方法などについてさらに深く研究・実践を行っていかなければならない。

○　少人数授業の成果を他の教科で生かすことには充分な成果を得ることができなかっ

た。少人数授業の研究だけにとどまることなく、その成果を他の授業でも生かしたい。
○　指導と評価の一体化を図り、評価を生徒に、また、授業改善にどのように活用していくか、今後も継続して研究していかなければならない。
○　生徒一人ひとりの学びに応じた支援を行うためにも、補充的な学習や発展的な学習の教材開発をさらに充実させる取り組みを進めなければならない。
○　発表の場では以前に増して積極的に行う姿が見られるものの、学校生活全般において生き生きと活動する生徒の育成に今後とも努めなければならない。
○　拠点校としての役割を考え、その成果を他に広めるためにどのような手だてが有効かを考えなければならない。
○　小中や中高との連携

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

○学習量調査
目　的　　定期テスト前における家庭での学習量を調査し、学習への動機付けやその量の妥当性を学年内で相互比較する。
内　容　　定期テスト前の約１週間における家庭学習時間をアンケート形式で求め、学年・学級比較をもとに生徒への指導をする。また、学年だよりなどでの記載により、学習時間の確保を保護者及び生徒に意識づけた。
時　期　　６月末の６日間、９月末の７日間、１０月中旬の７日間、１１月末の７日間、１月末の７日間（予定）
○少人数学習調査
目　的　　少人数授業における教材開発や指導法の工夫、改善のための資料とするとともに生徒の意識も調査する。
内　容　　県教委の調査票をもとに全校生徒対象に実施した。少人数授業に対する生徒の反応は、一斉授業におけるものより分かりやすいと答えた者が多かった。
時　期　　１学期末、２学期末
○市基礎学力調査の分析
目　的　　観点毎の基礎学力調査を実施することにより、基礎・基本の定着及び学力の向上への統計的資料をもとに今後の学習指導改善のひとつの指針とする。
内　容　　全生徒を対象に実施し、観点毎に分析した結果をもとに学習指導の改善に役立てた。基礎・基本の定着を目指して、長期休業中の個別的な補充学習などを実施した。
時　期　　１学期、２学期の年間２回
○県基礎学力調査の分析
目　的　　基礎学力の定着状況を把握するとともに、各学校における教科指導における指導内容・指導方法の改善・充実及び教育課程の編成の資料とする。
内　容　　３学年全員を対象として設問毎の通過率を算出した資料をもとに、特に低い設問内容を重点的に補う学習指導改善に取り組んだ。
時　期　　１学期１回
○内部評価の実施
目　的　　教育課程及び学校経営の改善及び職員の意識改革のため。
内　容　　教職員と全校生徒を対象に年２回実施し、意識の変容及びそれにむけての改善の指標として活用した。
時　期　　１学期末、２学期末
○外部評価の実施
目　的　　外部（評価委員及び保護者）からの評価を学校運営に生かし、より地域に開かれた学校づくりの検証とする。
内　容　　地域への情報公開がどのように浸透しているかやその方法改善の資料としている。
時　期　２学期末

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○研究会：学力向上フロンティア事業公開授業（中間発表会）
　日　時　　平成１５年１０月３日（金）１３：３０～
　場　所　　羽咋市立邑知中学校
　対　象　　県下小中学校教諭・地域高等学校教諭及び邑知中学校関係者…出会者約130名
　目　的　　学力向上フロンティア事業への取り組みの理解促進及び地域普及のため授業を公開し、本校の取り組みに対し相互交流及び適切な指導助言を受けることで、軌道修正を図りながら本校の現状に即した更なる学力向上を目指す。
　主な内容　授業公開及び少人数授業を基にした分科会（国語、数学、英語）の開催
　　分科会の司会運営に、近隣の中学校からフロンティアティーチャーの派遣を仰ぎ事業普及の一助とした。また、指導助言は中能登教育事務所の指導主事にお願いし、適切な示唆を多くいただいた。

○ＨＰの作成
　現在ＨＰは開設しているが、本事業に関する内容は乏しいため今後充実する方向で検討している。

○フロンティアティーチャーの活動
　研修会へは率先して参加し、情報の収集や本校の取り組みについて広く意見交換している。他校からの依頼があればいつでも対応できる態勢にある。

○他校への普及など
　本校では、少人数授業を中心に本事業に取り組んでいるが、国語科の少人数授業の取り組みについては他校ではあまり例がないため注目をあびている。
　また、評価規準の作成においては、評価と指導の一体化を進めるうえで、１時間毎に規準を設け毎時間の授業の評価を行える態勢作りが整った。評価規準の作成に関する他校からの問い合わせもあり、今後継続してより良いものに更新する努力をしていかなければならない。

○研究紀要の配布…地域内の小中高等学校（２月配布予定）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　・１４年度からの新規校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
・７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　・少人数指導　・Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】　・国語　□社会　・数学　□理科
・外国語　□音楽　□美術　□技術・家庭
□保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　・有　□無